

科学研究費成果報告書「近現代日本の政策史料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築」(基盤研究(B)(1)、代表者伊藤隆平成15・16年度、代表者伊藤隆、課題番号:15330024)より

9. 田辺 宏太郎氏

たなべ・こうたろう 千葉大学法経学部講師

日時: 2004年12月14日

出席者: 伊藤隆 季武嘉也 有馬学 梶田明宏 長谷百合子 濱田英毅 萩谷茂行
駄場裕司 藤枝賢治 赤川博昭 佐藤純子 宮杉浩泰 河野康子 今津敏晃
高橋初恵 埴ひろ子

伊藤 きょうは田辺さんに、『革新官僚の戦前と戦後』～戦後日本形成期における正木千冬日記を中心に～という題でお話をいただくことになっております。田辺さん、どうぞよろしくお願いいいたします。

田辺 ありがとうございます。本日は伊藤先生にご指名いただきまして、伊藤先生の目前で革新官僚を語らせていただくことは、不遜ではありますむしろ勉強させていただくことになると思っております。また、革新官僚の知識が全然なかった頃に、武田さんからいろいろなメールでご教示いただいて、革新官僚の定義などについても教えていただいたことを基にしておりますので、その点でも御礼を申し上げたいと思います。

きょうのお題でございますが、“たまたま”ご提供いただいた『正木千冬日記』というのがございました。お恥ずかしい話ですが、正木千冬は誰かも知らなくてそのまま日記をいただきまして、それから勉強を始めたところですので、諸先生方のご指摘、ご教示をいただきたいと思っております。

事の発端は、横浜国立大学で天川晃先生にご指導いただいている時に、水産庁から出向してきているキャリアの技官の友人がおりまして、彼が正木千冬のお孫さんでありました。政治史の研究をしていると言いましたら、「じゃあ、うちのお祖父さんがいろいろ残しているのを整理してくれないか」ということで、いろいろ史料をいただいたのがきっかけです。

最初に申し上げておきますと、戦前の、特に企画院事件の時の資料は、東大にいらっしゃった林茂先生が全部持ち去られて、林茂先生がお亡くなりになった後に正木千冬の奥様である春江さんが、「返してください」と林茂先生の奥様に申し上げたら、「どこにいったか分からない」ということで、未だに企画院事件関係の資料一式は穴が空いたままということを、改めてご指摘をいただきました。ですから、それが分かれば企画院事件の全容も分かるのではないかという期待を持っております。

伊藤 林茂先生のところに行って、なくなった資料というのはずいぶんたくさん他にもありますので、これは希望はあまりないと思います(笑)。

田辺 奥様の春江さんが、その一件から学会に対して非常に不信感をお持ちでいらっしやいまして、史料も最初のうちは孫の紹介だということもあって、原本を長期にお借りすることは出来ずコピーをとらせていただいたりしました。

内容に入らせていただきますが、この正木千冬日記を整理しているとはいえ、私は池田政治のほうを主にやっております、特に革新官僚が戦後に果たした役割という点に興味を持ってやっております。ただ、今日の先生方のお顔を拝見しますと、戦前のほうも是非ともお話をしておいて、ご教示いただきたいところがありますので、戦前と戦後に分けてお話を展開させていただければと思います。それからお配りしております資料に、正木千冬の略年表が5枚目の最後のページにホチキス留めをご用意しております。そこからお話を進めまして、途中でご質問をどんどんお出しただいて、私も勉強させていただこうと思っております。

正木千冬は、ご存知だと思いますが、正木直彦の長男でありまして、正木直彦は東京芸大の院長なども務め、岡倉天心からの三代目ですが、政治家でもあり、美術の大家でもあるという人です。その奥様の春江さんという方は、元は大原家という神戸に実家のある方で、高田屋嘉兵衛の四代目の娘であります。そういう関係で、非常に人脈の広がりのある方ではありました。ですから戦前でいいますと、社会主義関係者、それから共産系の方々の名前が山のように出てまいりまして、それを調べるだけでも、あまりにも私の手に余るところであります。

大正15年3月に東京帝大を出まして、その時の経済学部の指導教官が土方先生です。国民経済の推計などをされていた方ですが、この方とはあまり合わなかったようで、ほとんど繋がりもなく大学を出てしまったということです。大学在学中いちばん影響を受けたのが、東大新人会のセツルメント活動で、この方は府立の四中なんです、その時にロシア革命の衝撃を受けて、特にそういった社会主義的なものに目覚めたというふうに回想されていらっしやいます。

そのセツルメント活動の時に、さまざまな方とすでに出会っているわけですが、それはそれとして就職をしなければいけないということで、東京大学の岡義武先生のご尊父である岡実さんの紹介で、大阪毎日新聞社に入社します。これも父の直彦と岡実の繋がりで紹介をしてもらっているわけです。朝日新聞は広告部に配属だからというので嫌になって辞めて、毎日新聞に入社しますが、大阪はあまり好きではないけれど「エコノミスト」の編集部をさせてもらえるということで、大阪に赴任しております。

その時にこの大原春江さんという方と会われたのですが、大原春江さんすなわち奥様の正木春江さんという方もまた特異な方でして、いまの甲南女子大の前身に行っていた頃から社会主義に共感されていたようです。その正木春江さんのお姉さんのお婿さんが、木下半治です。フランス文学者でもあって、明治大学教授で、『ファールブル昆虫記』を訳したこともあります、マルクスの『フランスの内乱』を最初に翻訳した方で、エンゲルスの『私有財産および国家の起源』とか、『何をなすべきか』というレーニンの本を翻訳したのもこの木下半治です。特に学問的なところは強く木下半治に影響を受けたようで、すでに春江さん自身、産労にも出入りしていたというような、そういう方でした。この大阪産労に出入りしていた木下半治と正木千冬が仲が良くなって、「じゃあ義理の妹をもらってくれないか」という話のようでして、ご結婚されたというこ

とだそうです。ここでもう野坂と正木は出会っておりまして、産労のさまざまな闘士と一緒にあって赤旗を振って街頭デモに立つと。そして何度も捕まって、大阪毎日新聞社を追われることになってまいります。

もう一部の別刷りの資料の戦前のところに、多少詳しく書かせていただいたのですが、大阪毎日 にいた時に、共産党シンパの活動を続けておりまして、昭和4年の4・16事件で共産党員一斉検挙に引っかかって、この時に「エコノミスト」編集部をクビになります。レジメでも4、5行書かせていただいています、正木が大阪毎日新聞の編集記者手帳などを共産党の村山に貸すわけです。それをまた村山が共産党の大物福本和夫に又貸して、結局、福本が検挙されたために、正木がその支援者の張本人じゃないかということで捕まるという、消極的な支援ではありましたが、非常に大物視されて、当時から四回以上獄に繋がれるということをやっておりました。しかし、大阪毎日のほうも岡実の紹介だということもあり、直彦の関係もあって、そうそうにはクビにできない。そしてまた当時、「エコノミスト」に連載していた「戦争経済学」という連載物が大変読者に好評だったために、昭和7年に新聞社の席は剥奪されるのですが、10年までは毎日新聞社に嘱託として通って、給料を貰っているというかたちでありました。

その昭和10年に大きな転機を迎えまして、レジメにもありますように内閣調査局の専門委員になります。これは東大の経済学部の友人で、誰かは分からないのですが、こういう調査局を立ち上げるに際して、「ジャーナリスト出身で、経済が分かる人を募集している。おまえ、行かないか」と言われたと回想されていますが、その時の推薦者が迫水であります。彼とは一中の同期で、仲が良かったようです。昭和10年に入ってから後はとんとん拍子で、統制に参加していくこととなります。

ここで史料を回覧させていただきます。戦前の史料はあまり多く残っていないのですが、いわゆる任用証書だけがすべて残っておりまして、コピーさせていただいております。これがあるから戦前の史料もあるというのもあるわけですが、企画院関係のものはほとんどないということです。

そして昭和10年に入ってから、正木は主にずっと繊維と紙関係の統制を担当します。企画院の調査官、それから商工事務官というので、生産力拡充委員会の幹事をやったりして、物動の繊維部門、紙部門の第一人者といえますか、物動班の中の主軸の一人になっていきます。

最終的に昭和16年に「依頼免本官」ということで、近衛文麿から貰うわけですが、これは企画院事件で巣鴨に入ることになります。正木の回想にいろいろ書いてあるところでは、正直言って、事件そのものがよく分からない。ただし、正木の母親の家系だというふうに聞くのですが、平沼騏一郎一派であった塩野司法大臣が親戚で、企画院事件の1年前から再三にわたって注意をされていて、「おまえ、こんな活動をやめないと、いつか捕まる。役所の中でそんなことをやるもんじゃない」ということをずっと指摘をされ続けてきたそうです。そして昭和15年に父親の直彦さんが亡くなるのですが、その亡くなる3カ月ぐらい前に、春江さんだけを呼んで、どうもこういうふうになって捕まりそうだと。だから、後のことはよく頼むということで、二人で話したということにあるように、はっきりと捕まるということが目に見えて、アカの息子を非

常に心配していたということを証言していただいております。

ですから、企画院事件というのは正木に言わせると、従来の平沼一派との諍いというよりは、逆に資本家のほう、特に池田とか商工大臣をやった小林一三、そのあたりのいわゆる資本家のほうから、こういった統制屋を攻撃したひとつの事件の企てではなかったのかという回想もござります。ですから、もしかするとそういう点が企画院事件の真相に近いのかなというふうに正木は考えているように思われます。

巣鴨大学と正木は呼んでいましたが、そこに入ってから、しばらく読書三昧の日々を送るわけですが、取調べは一切何もなかったそうです。取調べに当たるはずの検察官がほとんど高校・大学の同期、同窓であると。府立四中から一高の同期であって、いわゆる「こういう調書をつくるから協力しろ」という書状だけが来て、一向にその友人たちが顔を見せない。戦後、そういう友人たちに事の次第を聞くと、「おまえを取り調べるわけにはいかないからな」というので、まったく何の諮問もなく、毎日毎日本を読むだけということであったそうです。

そして、昭和19年5月に出所しまして、しばらく茅ヶ崎のほうで静養した後に、これが不思議なんです、いわゆる自分が統制をしていた相手である日本曹達株式会社に入って統計課長をやります。ここでおそらく革新官僚の一面が見られるのかなと。自分が統制をかけていた相手から呼ばれて出所後に課長になると。そのままいたら重役ぐらいにはなれただろうと回想していますが、ここにもひとつそういうものが現れているのかなと思うわけです。

戦後に入るとまいますと、稲葉の国民経済研究協会に誘われて常務理事をやります。これは、もちろん稲葉と仲が良かったということもありますし、いわゆる国民経済研究協会に五万円をポンと出した海軍大佐の岡崎とも非常に親しかったということもあったようです。その常務理事として、事務全般と調査研究部門を受け持つということをやります。

この後また官僚の世界と繋がりが出てくるわけですが、昭和21年に経済安定本部部員になります。この時は、和田博雄が声掛けをして、当時ブラブラしていた正木を引っばるといいます。

ここからが主に戦後の部分に係わってくるわけですが、現在整理中の戦後の『正木千冬日記』は三冊だけです。これも原本のコピーを回覧させていただきましても、あまり綺麗ではない字で、しかも飛ばし飛ばしでありまして、私の力量に及ばないこともあってほとんどまだきちんと整理できておりません。ただ、昭和24年、27年、28年、30年あたり、それから鎌倉市長の56年以降というのが主でして、その部分を今回は復刻のような形で報告書にしております。これは東洋英和女学院大学の宮崎正康先生と、ちょうど他の研究会をやっておりましたので、その費用で、『正木千冬日記』を私立学校振興共済事業団の経費の補助金で一冊の冊子にまとめさせていただきました。

その内容は、昭和24年5月の商工省の調査統計局長の退任の時から始まります。ちょうど行政整理が行われるところで、商工省も調査統計局がなくなって商工省調査統計部になり、この局長を辞めさせられるというところから出てまいります。従来は、これは吉田内閣が行った行政整理の一環であったと。そして、こういった正木などのいわゆる革新というか、左系の方々が吉田

によって追われたというようところが文献などに載っているのですが、正木に言わせると、そうではないようです。いわゆるGHQのほうから、内閣統計局以外の統計関係は各省から全部排除しろ、なくせというものが来て、吉田はある意味で大内から頼まれて抵抗してもらったけれども、やむなく商工省の調査統計局もなくなるということで、その任を追われるというかたちになるようです。

ここで横道に逸れまして、正木とアメリカの関係でいいますと、この後、吉田の推薦も得て、正木が美濃部亮吉共々アメリカに勉強に行くという機会を与えられるのですが、美濃部にはビザがおりたけれども、正木にはアメリカの意向でビザがおりない。吉田の推薦ももらって日本のビザは出たのに、アメリカのビザが出ないということで、これから以降、正木は美濃部と違って反米になってまいります。そういうちょっとした感情問題でこじれることが多いのかなというところがございます。

ひとつだけ、この商工省の調査統計局長の中で興味深い革新官僚の意義づけとしては、指数統計に「総合化」の考えを持ち込もうとしています。これもご回覧させていただきますが、『日本における統計学の発展』ということで、正木千冬が東大の統計学の奥野定通先生などからヒアリングを受けた文部省のヒアリング記録が、一部だけ正木宅に残っていました。そこに書かれていることは、まさしく現在の失業推計とか、もしくは地震災害の時の産業連関推計の手法、それをそのまま正木は戦前からのものを持ち込んで、連鎖指数みたいな方法を統計学に持ち込もうと。これは企画院での物動計画手法の延長線上にあるものなことかと思えます。

その後、内閣統計委員会の臨時委員や第一次吉田内閣の時の内閣統計局の次長をやったりしていますが、ここまでのところ、ほとんど人から言われてなっています。あまり能動的に自分から動くというよりは、誰かに誘われて、誰かがトップでいて、「おまえ、ちょっと来てくれ」というので、その任に就くというのがほとんどであります。

このあたりから、大内兵衛、和田博雄との繋がりが深くなっていきます。というのは、大内兵衛とは企画院事件で捕まった時に、電話をもらって、鈴木弁護士を紹介されます。いわゆる企画院グループの弁護に当たっていただくというところから、急激に仲が良くなって、戦後は大内兵衛がかなりこの正木を実務家として頼りにしているということから、このあたりから大内兵衛との繋がりが非常に強くなっていくわけです。在学中に大内兵衛と何かがあったということは本人もほとんど残していないのですが、企画院事件の時、それからこの戦後のあたりから非常に関係が深くなるようです。

その後、ここに書かせていただいたような経歴で、主に統計の実務家というようになってまいります。内閣の統計委員会統計局、それから総理庁、商工省の調査統計局長、内閣の統計委員会の常任委員をやっております。そして統計委員会の委員までした後に、ここで一旦、行政整理に再度巻き込まれて職を失いそうになるわけですが、この時は和田博雄から声をかけられて、参議院の予算委員会……その時、和田が委員長をしておりましたので、専門委員に推されております。本人によれば墓場のようなところで、1年いけばこけが生えるということを日記に書いておりますが、1年のうち実働時間が30日ぐらいしかないこのところで暇をもてあまして、い

ろいろなところに顔を出しながら暇潰しをしている。その時に、「革新官僚の戦後」でご紹介できるところに、当時、北海道の田中という革新道政がありました。そこにさまざまに北海道の開発についてアドバイスをしに行っています。当時は吉田内閣が、北海道開発庁問題などで非常に揉めているところでありまして、この田中道政支援のために正木を含めた旧革新官僚系、特に和田グループが、何度か北海道政にアドバイスをしに行くという形跡があるわけです。この時もやはりアウタルキー経済の確立ということで、貿易や通商というものは彼の頭にはまったくございませんで、いかにしてアウタルキー的に北海道を開発するかというところを、さまざまアドバイスしに行くという構図が読めるわけです。

また、同じく長野県も革新県政でありまして、長野県のさまざまな課長や企画室から人が来た時に、アドバイスをしながら長野県政について総合計画をアドバイスするというをやっております。その繋がりがどのようにして革新に繋がったのかというのは、またこれからのところがありますが、人の繋がりとしては非常に面白いかと思えます。

それから、ちょうどこの時分に美濃部亮吉とはかなり合わなかったといいますが、一方的に悪口をたくさん書いておりますけれども、美濃部亮吉の引っ張り出しにも一役を買っていらして、大内から頼まれて、統計委員会の事務局長に、当時毎日新聞の論説委員をしていた美濃部亮吉と毎日新聞で面識があったということで、引っ張り出しをやると。それから、これはさまざまところに書かれていますが、「その時美濃部が、車をつけてくれれば、と言った」ということについては、ここも証言がありまして、「美濃部は、車をつけてくれれば行くというふうに言った」と、はっきりと言っております。その後、美濃部が、「いや違う。車をつけてくれるというので行ったというのは嘘だ」というようなことまで書いていらして、これが、その後の美濃部との愛憎関係が続く発端になっております。

それから後は、正木の中では非常にじくじたるものがあつたようですが、参議院の専門委員をしながらさまざまな革新についてアドバイスをするなかで、大内兵衛とは非常に繋がりを保ちまして、美濃部の二期目、それから蜷川京都府政の革新ができた時に、もう一花咲かせたい、いわゆる革新の花を咲かせたいということで、今度は正木自身が鎌倉市長に担ぎ出されます。これも当時、東京都の新宿区に正木直彦の実家がありまして、そこを住まいとしていた後、のんびり過ごそうということで、國學院大学の教授をして鎌倉に引っ越していたのですが、そこに、本人の弁では「担ぎ出し」を食らいまして、たとえば大仏次郎とか、そういった鎌倉文化人が、父直彦の関係で、「彼なら」ということで担ぎ出しを囚って、鎌倉市長に当選させてしまうということを行います。いまの鎌倉を見ますと、革新自治体の功罪は別として、自然を残すという観点からいうと、建設業者が市長室に殴りこんで来てても頑として開発を認めなかったという観点からは、多少とでも彼の功績があつたのかなというのが現状の鎌倉です。

その後、略年表を見ていただきますと、鎌倉市長を昭和 53 年 9 月に退任しますが、この時はご存知の通り社共連携が解けてまして、社会党が鎌倉市長を推さなくなる、いわゆる横浜の飛鳥田が、公明党の連携を目指して中央にもう一回出るということをやりますと、社会党内の分裂を見て、共産党支持だけになって最後、二期目で保守派に負けるというかたちになります。それから

4年間は俳句三昧の生活を送られて、鎌倉市の極楽寺という所で亡くなられるということであり
ます。ただ、鎌倉の極楽寺という所は、もともと労働運動の地区のようなところがある場所であ
りまして、最後までそういう観点からいうと、労働者の味方を自認して、一種思い入れを除いて
客観的に見ても、かなり優しくなった人なのかなと思います。そういう労働運動とか社会的弱者に
対しては非常に正義感を持って一生を送った方かなということが、全編を通じた感想でもござい
ます。

ざっとした流れは、あまり正木千冬についてご存知でない場合を考えてご紹介させていただき
ましたが、エピソード的に幾つかあまりこれまで触れられていないところを紹介させていただきます
と、たとえば、特に共産関係の人との付き合い。たとえば宮本顕治との付き合いとか、あと
尾崎秀美との付き合いが非常にあったということがございます。

たとえば尾崎との付き合いでは、この企画院事件で捕まった時に、「茨妻会」というのを獄に
入れられた人々の奥さん方だけで結成をして、何を差し入れられるか、そしてどういうことがで
きるかということをお話し合っただけですが、その中の一人が尾崎秀美の妻の英子さんという方だ
ったそうです。春江さん自身が山茶花を差し入れたり、さまざましていたそうですが、尾崎さん
とは戦前からお付き合いがあったようで、このアグネス・スメドレーの『女一人大地を行く』とい
うのを翻訳した第一版目を上海からこの春江さん宛てに尾崎が署名入りで送って、ぜひこういう
女性革命家を目指してほしいというようなことまで言われた。それを読んで感激したというよう
なことを書かれています。その本は千冬が捕まった時に、警察のトラック一台で全部持っていか
れたということも書いております。この後も尾崎秀美関係とは非常に付き合いがありまして、茨
妻会を金銭的に支援していたのが、とある日本の中国人。これ以上は奥様はニコニコ笑われるば
かりで、まったく何も言っただけなのなのですが、その茨妻会の金銭的な支援者は、とある中
国人であったということでもあります。そこから、尾崎と国内のそういったシンパの方々とのお
付き合いが非常に深かったところがございます。

この正木春江さんという奥様は、当時は九十一歳でヒアリングをしたわけですが、万全の記憶
力でして、まるで昨日あったかのように全てのことを明確にお話いただきました。その中から戦
前のことを拾い出して、そしてまた戦前の史料を多少でも頂いたというのが実際のところであ
ります。

戦前のところでもう少し掘り下げていきますと、たとえば野坂との関係、それから共産党関係
者との付き合いというのは、当時、千冬はどっち付かずで本当のシンパにまで入るほどの勇氣
はないし、アカの息子ということですが直彦が非常に理解があつて、そういうものを認めていた
ということもありますが、最終的には共産党員にまではいけなかった。ただ、やはり共産党の方
と非常に付き合いが深く、当時は新宿区の別宅、つまり直彦が買ってくれた自分たちの家には
ほとんど四六時中、共産党員が出入りをして、協議会や会合をしていたということです。その見
張り役を、春江さんという方が乳飲み子をかかえてやっていたという猛者でありました。

それから、先ほど簡単に申しあげました肝心の企画院事件の件ですが、これも申しあげまし
ょうに、林茂先生が全部持っていかれた以外のところで、ちょっとご紹介しますと、小林一三や

池田といったところから、資本主義に相対する企画院の統制主義を排せよというお話があったと。迫水とかそういったところはなかなか捕まえにくい。それで、ここからは大竹啓介さんの本にもあるように、いわゆる細胞活動をしていた企画院の下っ端のレベルが、上部にも支持者がいるんだということを言って、稲葉や正木たち、いわゆるピンカーズの名前を挙げたものですから、一緒になって捕まったというのがどうも真相のようで、平沼という言葉も挙げて、「いや、うちの親戚に塩野がいましたから。」というのが、正木春江さんのひとつの証言であります。

それから、エピソード的に後半にまいりますと、特に戦後になりまして、吉田との関係で「和田グループと吉田との関係」というふうに先般、河野先生に発表いただきまして、その続きであります。やはり吉田茂を決して悪く言わなかったと。和田グループと吉田の関係というのも決して悪くはなかった。和田の能力を吉田が買っていたという以上に、正木とか、いわゆる父親を吉田が知っている戦前のエスタブリッシュメントで、「ああ、あの人々の息子さんか」というような人々については、吉田はまったく悪くは扱わなかった。たとえば先ほど申し上げたように、アメリカのビザを発行して推薦人になったり、もしくは大内兵衛に統計の整備を頼んだというあたり。いわゆる「おたくの国に負けたのは、統計がなかったからだ」というあの笑い話以降、大内にそれを頼んでそれをやっていくわけですが、大内が拾い上げてくる革新といわれる人間に対しても、まったく支援を惜しまなかったということを春江さんは言われています。ただ、第三次内閣以降あたりからは若干、「吉田の爺さん、あんなことをやりやがって……」ということで批判的になっていくそうですが、吉田茂との関係は、終生ほとんど和田グループとしては悪くなかったということもあります。

というようなことで、お話を申し上げますと雑駁なんです。いま申し上げたところが、ご紹介している資料の1、2、3、4にある、特に戦後の部分になってまいります。最終的に、私の興味であります革新官僚の戦前が、戦後にどう連続して続いたのかということと言いますと、この和田グループというより大内グループというのは、戦前から戦後についてはまったく変わりがなく連続性を保っていたというふうに、少なくともこの正木の史料からだけでは言えるのではないかと思います。ひとつは統計学的な考えの連続性、そしてそれが戦後、産業連関表などにそのまま統計学として活かされている面、それから人脈的な繋がりというところでもあります。

この正木自身も、和田が生活に窮するあたりになりますと、和田に資金を提供して届けるというのが日記にも出てきておりますし、和田が精神的にも追い詰められた時には、非常に和田グループで結束して支えているというところがございます。

それからもう一点、いわゆる右派とって正しいのかどうか分かりませんが、岸、迫水といった右派の革新官僚との付き合いについては、岸とはまったく一線を画しております。ただ、迫水を通じて広がる迫水系の革新官僚たちとは、どうだったのか、これが私の興味の対象なんです。池田内閣での全総の開始、それからその当時の経済企画庁長官を迫水がやって、全総を推進していく長官になるというあたりで、彼らの考え、総合化、指数化というものが活かされていく面が、この関係史料から垣間見えてまいります。その部分をこれから自分自身の研究として深めたいと考えている次第であります。

この正木千冬というのは、あまり有名ではない中堅官僚であります。ただ、父直彦の関係というだけではなく、四中と一高のつながりで常に中心にある人々のプリフェリーに付き添っていた人間でありました。日記と残した史料では、数々の名前がどんどんと挙がってきます。

こういった革新派の人々が戦後どうしたのかというのを、たとえば宮内庁書陵部の高橋さん…今回、外務省革新派の栗原正の文章を書陵部でお書きになられていますが、高橋さんにもご教示戴きながら、この外務省の革新派との繋がりについても調べております。正木も大来との関係がありまして、外務省の特別調査委員会に正木が名前を連ねているわけですが、その時の史料などもいま、あたりつつあります。それと、戦後この半年間外務次官をやりまして、その時に革新官僚の追放をした松島鹿夫という、貿易省問題で揉めた人ですが、そのご遺族の方に日記の提供を二年間ぐらいつつお願いしております、それがどういう影響を戦後に及ぼしたのか、対アジア外交でどういうふうに効いてきたのかというところをまたひとつ、自分の興味の対象として、広がりを持たせようかとしておる次第です。

この内容に沿ってというより、ご興味のありそうなところをトピック的に出ささせていただきましたが、これから後は、なるべく質疑応答の中でご質問いただきまして、持てるものはすべて吐き出してから帰りたいなというふうに思っております。私からのご提供はこれぐらいにさせていただきます、質疑応答に入らせていただこうと思います。

伊藤 大変面白いお話をありがとうございました。私も聞いていて、吉田との関係とか、ちょっと思いがけないことがたくさんありまして、興味をもって聞いておりました。正木の付き合いの革新派といいますか、左翼といいますか、その中で普通、戦前、戦中、戦後も含めて、講座派と労農派の対立はかなり大きいと思うのですが、何かお話を伺っていると、両方とも関連があるという感じですね。後になりますと、だいたい労農派といわれている人たちとの付き合いが多くなるのかなということなんですが、その辺はどんな感じでしょうか。

田辺 たとえば、宮沢さんが55年体制については、「55年体制……、いやあ実感がございませんなあ」というふうに言われたのと同じで、正木の文章を見る限り、労農派、講座派というよりは、まったく人的な繋がりだけで、そういった色分けでは見ていないと思われま。

伊藤 そういう言葉も出てこないですか。

田辺 言葉もまったく出てきません。たとえばブハーリンの経済政策を戦後も和田博雄がやろうとしていた。彼は本当にアカであったかどうか。自分はそれには賛成だったと、そういう書物の問題は出てまいります。それ以外のところで、「派」というような、いわゆる労農派、講座派という区別はまったくつけていないのが事実です。先生ご指摘の通りでありまして、人的繋がりだけで見ているかたちで、その時その時でどんどん人が入れ替わっているというのが正木の日記から通して見た感じではございます。

補足させていただきますと、正木が霞ヶ関に出入りしている時にいちばん仲が良かったのは、枝吉勇という国会図書館の調査局長をやった方で、満鉄からインドとインドシナかどこかの調査班で、東亜研究所か何かに行った方なんです、そういう企画院時代からの付き合いで、麻雀卓を囲んでずっと遊ばれたりということをしていますので、本当に派閥という観点からは、これを

通して見た限りはあまり関係がないと思います。

伊藤 その期間を通じて、ずうっと一貫して仲間という感じで付き合っている人というのはいるんですか。

田辺 戦前戦中は特にないようです。それから企画院事件後のあたりから和田とは非常に親しくしている。ですから、その時その時の事件・事象によって、仲のいい方が替わっていつている。和田という方はあまりグループとか徒党を組もうという意志はなかった方のようでして、自らがお金を配ったり面倒を見たりというようなことはほとんどないし、請われたら、「じゃあ、うちに来れば？」というようなかたちで、引いていただく程度です。正木自身も徒党を組むというタイプではありませんでしたので、戦後に入りますと、彼が仲が良くなってくる方がクルクル替わってまいります。終生変わらないのは、企画院事件以来の大内兵衛だけでした、大内以外のところでは、ほとんど一貫して仲がいい方はいたのかな、という感じです。

河野 史料がこういうかたちで「革新官僚の戦前・戦後の系図」というのが出てきて、刺激的だと思いますので、これからぜひこの文脈を頭に置きながら戦前・戦後の史料を読んでいきたいのですが、二つほど教えていただきたいと思います。ひとつは、鎌倉市長に就任しますよね。この時に「革新の花を咲かせたい」というような説明をされたと思いますけども、鎌倉市長に就任するこの時期の革新という言葉の文脈は、どちらかという、もういわゆる革新自治体なり構造改革論の影響が出ている時代じゃないかという気がする、革新の意味内容はどこかで変わっているような気がするんですね。そこが、正木を通してはっきり出てくると面白いだろうと思うんです。

それがひとつと、それから、このキャリアを見ていった時に、幼稚な質問なんですけども、たとえば迫水なり大来は、経企庁で政策立案の第一線に就くわけですが、正木さんは、ご本人がそういうところに関心がなくて大学の先生になられたのか、それとも……。ちょっとそこが素朴な疑問としてあるんですけども、そのあたりはいかがでしょう。大内兵衛人脈ということだとすると、むしろ政府の中に入るような感じがして、ちょっとそのあたりの事情を教えていただければと思うのですが。

田辺 ありがとうございます。本当につたなく、話をできなかったところをご指摘いただきました。ひとつ目の、鎌倉市長に就任されたあたりに市長の革新の意味が変わってきているというのは、まさしくご指摘の通りでして、彼自身が革新の意味を理解しながらやったというより、大内に出ると言われたから出たということだけのようです。東京都に美濃部を引っ張り出してくる時も、「彼なら大衆受けするだろうから、君、行ってきてくれ」というのが大内の思いのようでして、革新という言葉の意味の定義をしているよりは、いわゆる自民党に対して、社会党左派をいかにして応援するかという大内の言葉だけに乗っているというところが、東京、それから横須賀の伊藤、それから藤沢の葉山、あのあたりの革新自治体、そしてまさしく横浜市の飛鳥田も一緒に手を携えてやっていくというあたりが正木のもの見方のようなようです。鎌倉市長立候補の時も、文化人とか立教大学の名誉教授になられる方などが最初の名前で出てくるわけですが、「君、行ってくれ」と大内に言われて、仕方なく出ると。公示1カ月前になってようやく出てくるわけで

す。

そこで革新の意味を彼自身がどう理解していたのかということ、政策綱領的なところはほとんどございません。いわゆる文部省の時代の重点領域研究の時に、貴島さんとか、国際局長をされた藤牧さんにインタビューをしたのですが、まったくそういう方々の構革論というようなもの、それから社会党の中での論争というものからは 100 歩ぐらい違うところで、大内兵衛が杖を持って、単に先陣を切って政治的に「ここに革新市長を出すんだ」ということだけをやっているのが事実のように、この日記上からは思えます。

河野 鎌倉市長に出た時の正木さんは、むしろ戦前期の革新官僚としての存在感を押し出して、ここでの選挙に臨んでいるということですか。

田辺 蜷川、正木、美濃部というのは、大内を中核にして、その線が出てきたといえますか、大内が後ろで手を引いて出したというのが、いまこの史料を見る限りにおいては真相じゃないのかなという感じがしております。ですから、この後二期目のところで社会党の内紛があり、横浜の飛鳥田が公明党と手を携えて中央に出て行く、その時には葉山も伊藤も脱落して、いわゆる本当の革新ではなくて、社会党の中の政治闘争になっていく。そこを正木は一步引いてしましまして、「僕はそんなものについていけない。飛鳥田さん、中央に行かないでくれ」というふうに、何度も電話で懇請するのですが、最後の怒りの電話を切ったあとは、飛鳥田と絶交状態になって、話をしなくなってしまうということです。ですから、構革論争云々という社会党内部の論争には、まったく彼はタッチしておりません。大内自身も、ほとんどそれについて論評を加えたり何かというのは、正木の日記を見る限り、奥様の話を聞く限りはまったくございません。

それから二点目の、なぜその本人が政策立案の中心に関心がなかったかということ、それはひとつには、この革新官僚に二つぐらいの流れがあって、いわゆる戦前エスタブリッシュメントの師弟であるお坊ちゃんの方々と、稲葉のようにガツガツ表に出てきた、特にバックグラウンドを持たない人間との違いかなと思うのですが、正木を含めた人間は、あまり戦後の総合化とか計画化の中に出てこようということをしない。稲葉とか大来みたいな人はどんどん前に出ていくのですが、そのための資料提供とか、そのための補佐とか、そういうことばかりに終始してしまして、自分が何かをしようというところはほとんどありません。外務省特別調査委員会のことも、奥様はほとんど話は聞いておられなかったのですが、資料と統計学的なところは全面的に提供して、大来と一緒に東京に行くときはよく美濃部の車を使って行っていたと。そして車中でいろいろ議論をしたり、それ以上参画して委員になろうなんていうのはほとんどなかったというふうにも言われています。

じゃあ、大内が何を考えていたのかといいますと、そこもあまり大内が政府の総合計画とか戦後の政策にタッチしようとしたような痕跡は、正木の関係の史料からは出てきません。革新自治体のあたりになると、急激に大内が活動を始めるのですが、この昭和 20 年代のあたりでは、大内は吉田との関係が多少悪くなって、統計委員会を潰される時まではある程度、統計の整備という学者的なところがありますけれども、それ以降は政策立案に何かタッチしようという気をまったく持っていないように見えます。和田、大内、正木というこのあたりのグループは、あまりそ

ういうところにはタッチせずに、自分たちがやりたいことをやる。

補足しますと、この正木はお子さんが四人もいて生活が大変だったので、参議院の専門委員に引かれた時に、給料がいいから行くと。そして暇であると。そういうことでやっているだけでして、それ以上何か欲を出して猟官活動をやるということは一切やっていません。鎌倉市長の時も、結局親の七光りで、それは本人がいちばん嫌がっていたそうですが、文化人が結集して押し上げてくれただけのことで、本人は最後まで誰を出す、彼を出すということで大内の連絡役に徹していたというのが実態でもございました。答えになっているかどうか分かりませんが、ありがとうございます。

伊藤 ご本人は、自分をどういうふうに規定していたのでしょうか。統計学者だと自認していたのでしょうか。

田辺 統計学者というよりは、「その時々友達や関係者の求めに応じて職を転々とした」という一行がありまして……。

伊藤 それはそうでしょうけども、職を転々とするためには、やはりその人の特技といいますか、これはウリになるというものがないと、そうはいかないと思いますが。先ほど回してくださった中に、『日本における統計学の発展』が入っていますね。ということはつまり、彼は統計学者としての自己認識もあったと。

田辺 統計委員会が終わるまでは、統計学として名を立てようとしていた痕跡もあるのですが、そこで統計から離れて、自分の生活のために参議院の予算委員会の専門委員になってしまう。そこからは日記にもあるのですが、予算の専門家として頑張ろうと一時は思ったと。それで最初の1年間頑張ってみて、「ここは墓場だ。辞めてやる」というふうになってからは、もう自虐的な生活を13年間しておりまして、自分は予算や財政の専門家というよりは、という感じです。

伊藤 さっきの『日本における統計学の発展』のあれでは、どういう話をしているわけですか。

田辺 いわゆる統計学の、特に占領期から高度成長期にかけて、どう統計を整備したか、自分が係わったことは何か、ということヒアリングに応じて答えを引き出されていると。事実はどうだったんだよということを言っているのですが、それに果たした自分の役割というのはほとんど語っておりません。

伊藤 戦前との係わりはそこでは全然触れていないんですね。

田辺 ええ、戦前との繋がり、先ほど申し上げた一点だけです。いわゆる指数化、総合化という物動計画の考え方を、戦後の産業連関表などに統計学の中で活かしつつあったという点があるだけで、それ以外の観点からは戦後に続くものは特に触れておりません。

伊藤 統計学者との係わりというのはないんですか。

田辺 はい。

伊藤 たとえば有沢さんとか、いかにもありそうな感じがするんですけども。

田辺 ほとんど有沢先生のお話も出てまいりません。いわゆる傾斜生産方式についてどうだとか、自分がその時に見聞きしたこととか、そういうことについて奥様からもヒアリングをしたのですが、その中において役割を果たしたとか、もしくは統計の整備に尽力したということは一切この

中では触れられていないです。ただ、数字を見るのには抜群の勘があったようでして、それで大内に非常に可愛がられたところがあるみたいですが、それ以外のところ、正木さんが言うには、大内の使い走りのなところ以外では、ご本人にそういう自覚は乏しかったのではないかと思うんですが。

伊藤 その日記の中に、「革新」という言葉は出てくるのですか。

田辺 「革新自治体で鎌倉市長を受ける」というところまで、革新という言葉は一切出てまいりません。一つだけ彼が書き残した『随筆・鎌倉市長』という本の中に、結局革新というのは何だったのかということに触れているところがありまして、「だからナチスの社会経済機構なんか研究してみたり、経済統制を強化するという線で提言してみたり、いまになってみれば本当に左翼的な立場で戦争を批判していたのか、あのような資本主義の生ぬるい戦争経済じゃ駄目だから、もっと戦時統制を強化しようという促進のほうに向いていたか、はっきりしません」というふうに書いてあります。そして質問者が、「統制経済というのは、一步ひっくり返せば社会主義経済に繋がりますからね」と問いかけると、「そう、その時分、紙一重です。迫水にしても毛利にしても、その時分の革新官僚の連中は、ほとんど紙一重ですよ。ナチス的とも言えるし、社会主義的とも言えるし、真からの資本主義を信仰していないという点で言えば、彼らもアカだったと言えるでしょう。私もそこにいたんです」という言い方をしている。

伊藤 非常にいい言い方ですね。

有馬 先ほどの河野先生のご質問とも少し関係するんですけども、きょう伺っていて田辺さんのお話でいちばん印象的だったのは、エスタブリッシュメントの子弟というような、そういう括りがあるんだと。僕は、この正木千冬の企画院事件で収監されるあたりのことを伺っていて最初に思ったのは、稲葉秀三さんの回想と随分印象が違うなというか、稲葉さんにとってはあれは大変なショックで、本当に一時期はもう自分は駄目だという感じで回想には書いていますよね。もちろん先ほど出てきたようなさまざまな要素から、正木に対する取調べが緩かったということもあるかもしれない、それもひとつでしょうけども、やはりどうもカルチャーが違うグループがいるという感じがするんですね。そうすると、戦後の革新自治体、革新市長の裏にいたというその大内兵衛自身が、まさにそういうエスタブリッシュメントの中において、そこで操作している人間として見えてくるわけです。もちろん美濃部亮吉もそうである。そうすると、あの時期の革新自治体、革新市長が成立していくときの革新ということの中に、ある種、そういうカルチャーとしてのエスタブリッシュメントの世界、そういうところから出てくる革新ということをちょっと考えておいたほうがいいのかなという気がする。それを戦前まで遡らすと、それこそナチスと社会主義と統制経済と紙一重というところで、下から盛り上げていく社会変動みたいなものとはやや違う、もうちょっとお上品なといいますか、そういう革新の発想というものがあるいは想定できるのかもしれないという気がちょっとしたんですけども、そのあたりは史料をご覧になった感想としてはいかがですか。

田辺 ありがとうございます。先生によって逆に整理をしていただいた感じがしまして、非常に勉強になりました。先生のご指摘の通りでして、私は吉田との繋がりということを見ながら見て

いたのですが、そういう人々と稲葉のグループとはまったく隔絶しているなという気がします。正木自身も稲葉には、「稲葉」と言ったり、「稲葉君」と言ったり、どうも自分より格下的に見ているところがある。大来さんとも自分は違うと思わせるところがあって、そういう観点からも、まさにお上品な革新、上からの革新といいますか、「何とかしなければいけない、このか弱き労働者を」というものと、自分たちが這い上がる術としての革新という、その二つのグループがうまくミックスされた時とそうでない時がある。革新自治体の研究をちょっとやりまして、横浜の飛鳥田の話は何人かから伺ったときも、「あれは横浜のカズちゃんだ」と。お父さんの息子さんだと。「彼だろう。だから市長なんだ」、あれは社会党だから市長になれたのではないというのが事実でして、横浜市長室には建設業者も山ほど来ていた。「カズちゃん何とかしてくれよ」というので、マアママ、ナアナアで常にオープンにしていたんだと。それをもって何が革新だというのが、秘書の末端にいた方のお話でして、まさしく先生ご指摘の通りだと思います。ですから、革新ということで、社会構造を変えようというひとつの理念は共有しつつも、はっきり申し上げて、二つのグループに明確に分かれていたような感想をこの中から思っております。それは先生ご指摘の通りだと思います。

つけ加えて言いますと、正木が生活に困らなかつたのも、生活にまったく不自由しない部類であると。そういう方々とやはり稲葉、大来というのは全然違う。それが河野先生のご質問に繋がるのですが、ガツガツしないところと、一步置いて、協力を頼まればやってあげるという戦後に繋がっているのかなという感じはします。それだからこそ、先般の河野先生の発表にもありましたが、吉田との関係は悪くなかつたのかなと。つまり、結局はエスタブリッシュメントとして、「ああ、どうも」と言える仲だから、お互いにツーカーであったり、批判もなければ、お互いに繋がる場所があつたのかなという感じがあります。

伊藤 石橋湛山とか高橋亀吉とか、「エコノミスト」に係わつたような人々との付き合いというのは、その後は出てこないですか。

田辺 高橋亀吉は、岡実の紹介で毎日にいる時、「大阪毎日も雰囲気非常が悪いので、俺も近々辞めようとしているから、来ないほうがいい」という話をしてもらっているぐらいですが、その時以外はほとんどお付き合いがないみたいです。高橋亀吉とは戦後、多少とも研究会などに入っている時には、「どうも」ということはやっていたようですが、それ以上のことはほとんどなかつたみたいです。いわゆる独自の道を歩んだわけではないですが、あまりそういう方々とは付き合いがなかつたというのがほとんどのようでした。

石橋湛山との付き合いも、まったく戦後は欠けています。社長に挨拶に行ったというような記述もありませんが、石橋湛山に何か影響を受けたというようなことも、どこにも一行も触れられていないです。

伊藤 社会党員ではなかつたんですか。

田辺 その時々選挙で誰に投票したかというのものもあるんですが、社会党左派の帆足にたとえば一票投じた。でもそれは、帆足と仲がいいから投じた。それ以外のことではないということ言われていまして、特に左派に対しては、すぐその後、「1カ月ぐらいで幻滅を感じた」とか、

「この内紛は収まりそうにない」とか、そういう非常に突き放したものの見方をしたりしております。

伊藤 じゃあ、いわゆる社会党の政治家との付き合いというのはあまりないわけですね。

田辺 そうですね。参議院の予算委員会が出てきたところで、結局自由党の答弁も書き、社会党の右派と左派の答弁も書き、その日が終わってみたら全部自分が書いた答弁だったというふうに書いてあるぐらいでして、そういうお付き合いはあるのですが、だからといってそれで取引をするわけではなくて、自分の業績として、「きょうは良かった。満足しせり」というような感じで書いてあるような……。

伊藤 幸せだ（笑）。

田辺 ですので自由党、いわゆる岸とは安保以来は離れていくのですが、やはり岸をある程度評価しているところもありまして、「彼でなければできなかったようなことがあっただろう」とか、「自由党の幹事長としては、さすが自由党の幅の厚さを感じる」というようなことも書いてあります。決して安保までは特に批判的なことは書いておりませんので、右も左も、結局はそういう仲であったから呑み込んでいったのかなという感じはあります。

有馬 帆足計とは企画院時代からかなり付き合いがあるんですか。

田辺 いいえ、企画院時代はそんなに付き合いはありませんで、戦後帆足が出てから後は、彼は非常に戦前苦勞をしたから支えてあげようというような、そういう記述が多少あるぐらいですね。あとは投票の時に必ず投じたというぐらいで、それ以外はほとんど付き合いがないみたいです。

伊藤 日曹に入ったのは何がきっかけでしたっけ？

田辺 日本曹達に入ったのは昭和 19 年ですね。これは統制をしていた担当先でして、どうも声を掛けられたと言っはいるんですが、自分が食わなければいけないので、入れてもらったというのが真相のようです。席はあるかたちで、重役待遇で課長職として統計整備をされていて、相当な給料を貰っていたみたいです。「戦後も稲葉からの声掛けで国民経済研究協会を立ち上げなければ、そのまま重役くらいにはなっていただろう」というふうに自分では言っています。

伊藤 日曹の関係の人の名前としては、どんな人が出てくるんですか。

田辺 日本曹達自体の誰かからこういう話があったという具体名は、一切出てこなかったです。奥様からもそれについてはまったくコメントがなかったです。

伊藤 その時代の日記も、もちろんいまはないわけですね。

田辺 はい。統制経済をやっていた時の付き合いというのは戦後もそのまま続いている。人的系脈が途切れない限りは、電話一本で物資をいくらでも届けてもらえるという関係が続いていたみたいです。

伊藤 僕は、一般的に統制をやられた方は、「こん畜生」と思っていたと思うんだけど、そうではないんですね。岸さんもそうじゃないですか。

田辺 おっしゃる通りです……。

伊藤 結局統制をやった相手のところから資金を貰って戦後、出てくるわけですからね。

田辺 その統制にどれだけのうまみがあったのかということについて語りたくないから、どうも

戦前の史料についてはという思いです。そういう方ですから、ちょっとそういう感じはありまして、だから革新の戦前の部分については語りがないのかなと。稲葉文書についても、ほとんど同じ意識を持たれているのではないのかなというところがあります。お互いに良きことをしたんだと。自分たちにとっては良かったんだと。それは社会のために本当になっていたのかというと、はなはだ疑問だった、という後悔は持っていたみたいでして、そうすると、革新官僚というのは何だったろうということになります……。

伊藤 さっきの話じゃないけど、紙一重でやっていたわけですね。

田辺 しかも、ちょうど右と左が背中合わせで……。

伊藤 迫水は右とはちょっと言えないと思うんですけどね。

田辺 そこは、戦後の池田のところを見ていた時に思いついたんですが、下村治などは、金融課長で迫水の下で統制的なところをきちんと習って、それを池田内閣の高度成長のところに活かしたというところがあると思うのです。そうすると、迫水の考え方としても統制派でして、戦後もそれが計画の中で出てくるわけですが、右か左かといわれると、統制をして社会を改革する、それだけではなくて、日本全体を改革するんだという点でいえば、若干右に行くかなと。

伊藤 いや、右というよりも、やはり統制官僚の人たちの話をいろいろ聞くと、信念がない。要するに、革新の信念のない革新派だという言い方をされますけどね。仲間ではあったけども……。

田辺 右か左かという、正木は左だったけれども、右の方は何となく自分の利益があったんじゃないかなと。というより、自分たちとはちょっと違う。一本通るといえるのはプリンシプルという言い方をされましたけれども、「あまりプリンシプルがなかったな」というとらえ方のようにです。

伊藤 いまのお話を伺っていると、正木千冬にとっての政治性というのはあまりはっきりしないですね。

田辺 はい。正直言いまして、自分自身が政治性を持たないようにしてきたのかというと、そうではありませんで、市長に請われて二期目になるときは非常に政治性を持って、七十になろうとしている時に政治的に動くわけですが、そこまでは自分の政治性はほとんど持っておりませんでした。

伊藤 二期目に立った時は、もう共産党の支持だけなんですか。

田辺 二期目の時はまだ社共共闘でして、最後の社共の連携の時期です。三期目に立つ時に社共が離れていきまして、共産党一党だけになります。

伊藤 社会党は何で離れたんですか。

田辺 結局、左派と右派とのいわゆる構造改革論とか、そのあたりの対立が出てきて、統一候補を立てるにはもう社会党の内部が持ちこたえられない程度になりました。しかも、もうひとつ公明党問題が出てきまして、公明党をどう扱うか、どう見るか、推す、推さないというので、その時の統一候補の見方が変わってしまうと。飛鳥田は公明党も取り込んでというので、葉山や伊藤と手を携えて中央に戻っていきますが、それに賛成できない方々は、公明党というのは違うんだというので、正木のように引いてしまう方が出てきます。

伊藤 しかし戦前の日記をずうっと繋げてみたら、すごく面白いことになりますね。そういう人間関係がかなり大きなウエイトを占めますから、人名索引を付けないと話にならなくなりますね。

田辺 確かに、僕があまり知識のない共産党関係の方の名前がどんどん出てくるんですけども、そういう方々と……じゃあ戦後も同じように革新かという、まったくそういうのはございませんでして、野呂とかそういう名前もたくさん出てくる。非常に仲が良かったというのですが、戦後はまったくそういう方々とは付き合いがなくなったり、というかたちがほとんどです。

伊藤 大内さんのグループに入っていれば、日本共産党との関係は本当はあまり良くないはずなのに、最後は日本共産党だけに支持されているというのは、ちょっとよく分からないね（笑）。

田辺 分からないですね。この尾崎秀美とは獄中で一緒に、奥様同士も仲が良かった。このあたりで宮本の話が出てくるんですが、その頃までは宮本さんとは特に付き合いはなかったけれども、ここでも茨妻会で、宮本の奥さんの百合子さんが偶然面会に来て、茨妻会に入られて、ここからの縁で一緒になったと。ところが三年目、獄中の巣鴨で正木千冬が偶然宮本さんとお風呂で一緒になって、「感激した」と言っているんですね。普段はお風呂は交代制なので人とは遭わせないようにしていたそうですが、向こうの手違いでたまたま一緒になって会話をして、戦後、鎌倉市長に立った後に宮本さんから連絡があって、「あの時はどうも」というので、また良くなっていったということのようです。

伊藤 幸せな人ですね（笑）。

田辺 非常に（笑）。そういう点では、従来の見方を覆していただける方といえますか、そういう立場だからこそ、この色を通して見たらそこだけが見えるのかもしれない。

伊藤 正木千冬、ないしはペンネームで文章をたくさん書いていますか。

田辺 この方は『随筆・鎌倉市長』というのを一つ残されているだけでして、それ以外ではまったく……。いわゆるこれだけ研究肌でありながら、何か文章を書くというのはほとんどございません。全部短歌か句にして残していらっしゃいまして、それ以外のところでは文章は残しておられないですね。

伊藤 時評とか時論とか、そういうものも書いていないわけですか。

田辺 ないですね。「エコノミスト」で、いわゆる毎日新聞として匿名で書くというのがほとんどです。ここはもうひとつの興味なんですが、たとえば外務省の特別調査委員会、それから各種の委員会の委員をしているのがバーッと出てきているのですが、そこで彼がどの程度の役割を果たしたのか。もしかすると、ほとんど書き物としては彼がやって、誰かの名前で出していたのかもしれない。「大内先生から言われて書いた」「大内先生から言われてこういうことをやった」というのを書いてありますから、もしかするとほとんどの部分は彼がやっていたのかもしれないなと。外務省の特別調査委員会のこと、それからもうひとつは、通商とか貿易はほとんどなくて、アウタルキー経済的な書き方をしている。それは彼の見方そのままです、もしかするとそういう部分があったのかなと。だからあまり残していないのかなという気がします。

伊藤 彼の経済についての考え方の枠組みというのは、戦前、戦後とあまり変わらないような感じですけども、それと、さっきおっしゃった池田の総合開発の考え方がうまく繋がれば、非常

に面白いですね。

田辺 たとえば『黒金泰美日記』を拝見すると、そういった戦前からのものを連綿と迫水が総合化しているんだということにならないか、と。これは何か文章が出てくると本当に繋げられるのかなと。「その一行を引用させてください」というので喧々諤々して、結局まだできていないのですが、迫水が何か言った残したというものがあれば、立証できるのかなと思っております。

伊藤 迫水の史料というのは、いままで聞いたことがないですね。

駄場 福本和夫とは直接の面識はなかったのですか。

田辺 ええ、このいろいろな証言によりますと、野呂栄太郎とは非常に親しかったというところがあります。ところが福本さんと直接というのはあまりありませんでした、福本さんと話して何か、ということとはほとんどありません。ただ、野呂さんとは藤沢市の鵜沼の自宅にもしょっちゅう行き来をして、新婚当時から一緒だったというふうに奥様が言われている通り、非常に仲が良かったみたいです。その関係でいろんな人を紹介されて、新宿の矢来町の自宅に来られたうちの一人だったみたいです。

駄場 野坂（参三）との個人的な接触は、戦前からだったと。

田辺 はい。もしかすると、木下半治とか大阪の産労の関係で、繋がりがもっとあったのかもかもしれませんが、その辺についての文章は残っていないんです。

駄場 野坂の義理のお兄さんで、次田大三郎との接触というのは出てこないですか。

田辺 そこまでのところは特に出てこないですね。野坂の名前までですね。ほとんどその当時も、「野呂さんが」「野呂さんが」と。だから野呂さんがいろんな人を呼んでくるから、野呂さんが……というので、直接の接触役は野呂栄太郎だけでして、それ以外のところは直接というのはないです。そういう点で、共産党の活動に本当に入るところまでいかなかったのは、結局、人の繋がりで頼まれて、「ああ、そうですか」「いやあ、それはいい考えです」と言っていたぐらいだったというのが真実みたいです。

伊藤 さっきは人に頼まれて云々と。頼まれたらだいたい引き受けるんですか。

田辺 その自分たちのグループのような人々からは、ほとんど頼まれれば引き受けると。稲葉とか大来から頼まれたらどこまでやっていたかという、特に稲葉に関しては、国民経済協会以外ほとんど付き合いはありませんでした。戦前との付き合いの延長線と企画院人脈以外では、あまりそういうことはないですね。

伊藤 企画院事件の他の仲間たちとの関係はどうですか。あの時、勝間田なんかも捕まっているでしょう。

田辺 はい。戦後、社会党に勝間田がいて、当選したあたりから若干付き合いがあって、予算のところこういう話があって資料をあげたとか、そういう話ぐらいは出てくるのですが、あまり大きく書かれているところは、勝間田その他はないです。

伊藤 もっぱら和田ですか。

田辺 和田の部分も、お金を提供するぐらいに付き合いが深いにもかかわらず、書き方としては若干距離を置いた書き方でして、「和田さんが」とあっても、それ以上の大内先生みたいな書き

方にはならないところがあります。和田さん自体がそういう方だったというのがありますが、和田グループといいながら、じゃあ具体的に思想やそういうことを統一して何かやっていたかというのと、和田グループというよりは大内グループであって、和田グループという感じを持っているとはあまり思えません。

伊藤 多少、大内グループという感じは持っているんですか。

田辺 大内グループといっても、大内先生の弟子だと、「大内先生が言われるから」、というその一面だけでして、大内先生から頼まれたから大来に車を貸してあげて一緒に乗って、参議院まで行ったとか。それがすべてです。

季武 ちょっと本筋と離れますけども、私は田辺さんとは今、戦前期の選挙の史料を何とか発掘しようというので、そこをいろいろやろうとしているのですが、田辺さん自身は、僕の知っている限りでは内務省系統の人とか、自民党であれば宏池会とか、それだけでなくいろいろ人の史料を探しているようですが。いい史料に出合ったというようなことがあれば、ご紹介していただきたいのですが。

田辺 これも回させていただきますが、神戸に松島鹿夫の親戚の方がいらっしゃいましたので、神戸新聞に載った記事をいただいて、そこから外務省の革新派をどうやって彼が切ったかということですが、息子さんがいない、としています。あと黒金泰美のものは、検事調書として全部扱われていたものを、黒金の子息が三菱商事におりまして、三井銀行に勤めていた時代にちょっとお付き合いがあったのですが、それも本当に黒い霧ですので。そういうものが山ほどあって、どうしたらいいのかなど。これはぜひまた伊藤先生にオーラルヒストリーの関係でこじ開けていただければと思っているのですが……。

正木もその内の一環でして、林茂先生の一件があったものですから、もう二度と出たくないというのを、お孫さんからようやく言っていただいたのが事実でもあります。

伊藤 いままであまり断られたことがないので、そういう場合はいったいどうしたらいいのかというのは、自分自身でよく分からないですね。何とか粘って。

田辺 ですので、先生からご指摘いただいた通り、戦前の選挙史料についても、誰々のお孫さんがいまだこの町長をやっていると、そういうルールがあって、「いや、それはちょっと」「それはちょっと」というのが。

伊藤 それは情報公開ではできないんですか。

田辺 情報公開ですと、個人名文書というところに引っかかりまして、個人名のところはすべて黒塗りを出していいということになっていて、真っ黒で出てきます。

伊藤 きちんと繋いでおかないと、代替わりの時にバーンと捨てられてしまうという危険性が高いですからね。

有馬 いまの木下半治の関係史料は、春江さんが持っておられるんですか。

田辺 春江さんのお姉さんが木下半治の奥さんですから。もうご存命ではないと思います。

ご質問いただいてありがとうございます。自分の勉強になりました。ただ、もうひとつの関心は、革新自治体がどうしてできて、その功罪は……個人的には罪のほうが多かったと思うので

すが、功の部分もあるとすれば、それをやっておかなければいけないという関心があります。とすると、先ほど伊藤先生や諸先生方にご指摘いただいた通り、革新自治体というのは本当は何だったのかというと、本当に「革新市長というよりは」という戦前のものと同じものを感じまして、ちょっとした付き合いの中で、自分たちのヌエ的なものをなしていたのかなという感じがあるんですけれども。

それに、藤沢の葉山、横須賀の伊藤というような人が、ある意味稲葉のようにして、「じゃあ俺も下から這い上がっていこう」というので、手を携えるかのようにしてやって、同床異夢を見ていたという感じが少なくとも首都圏ではいたします。京都の蜷川とは、統計で付き合いがあったのがたぶん定説だと思いますが、そうではなくて、中小企業庁長官を辞めさせられるよりもずっと前、戦前の頃からすでに企画院の関係で、蜷川、大内、正木、その他、いわゆる戦後の革新自治体に繋がるような方が、連綿と記憶の繋がりがありまして、戦後にしょっちゅう京都へ行っては応援して。ですから、ひと言で言ってしまうと、人の好き嫌いでそういうものがあつたような気がしまして、それを理論的に革新自治体というよりは、というのがありました。

伊藤 実も蓋もない話をしないように (笑)。もうちょっと格好つけてください。

田辺 それをどうやってうまく意義つけるかというところで悩んでいるところです。

伊藤 そうですね、革新自治体といっても自治体によって随分違うと思いますし、何でもそうですけども、功罪があると。いまも地方公務員の給与がすごく高いのはそのせいでもあるんですけども、その人たちにとっては功でしょう。もし他にご質問がなければ終わりにしたいと思います。思いもかけない話が出てきたりもしました。どうもありがとうございました。

(終了)